

看護学部看護学科准教授 糸川紅子 (2020.7.15)

2020年、世界中の人びとがCOVID-19の蔓延という終わりの見えない危機に直面しました。感染症の流行は、過去にも戦災を上回る勢いで人びとの命を奪いました。私は科学や情報化の黎明期に、人びとが感染症の流行をどのように乗り越えたのかという疑問を持ちました。そこで手にとったのが本書でした。読み進めるうちに‘看護の偉業と本質’を表すエピソードを見つけましたので、本稿でご紹介いたします。

1. 脅威たる所以と看護の偉業

1918年に起こったパンデミック「スペイン・インフルエンザ」は治療法がないばかりでなく、重篤化の速さから‘劇症型’と呼ばれました。下記の一節は、有効な治療がない中での看護が成し遂げた偉業について表しています。

インフルエンザ、肺炎のどちらにも有効な医療技術はなく(中略)、温かな食事、暖かな毛布、新鮮な空気、そして看護婦自身が皮肉を込めて「TLC」と呼んでいた「優しく愛情に満ちた看護(Tender Loving Care)」が、患者の命をつなぎ止め、この病気が過ぎ去るまでのあいだを持ちこたえさせるのだった。—「大いなる影」本書・p27より—

今昔問わず、ウイルスの脅威たる所以は特效薬が存在しないことです。特效薬がないということは、暗闇の中で灯りを持たずに彷徨うことに等しいです。このTender Loving Careは、特效薬のない暗闇のような状況に光をもたらした看護の偉業といえます。

特效薬の開発、いわゆるCureは間違いなく偉業として歴史に刻まれるでしょう。一方、看護者が提供したCareの功績はどれほど脚光を浴びるのでしょうか。CureとCareは双補完的な関係性にありながら、しばしば社会的な認知度が異なります。Careが人の生命活動の根源に位置するゆえ、突発的な発明に比べて見劣りすることが危惧されます。

2. 記憶に残る癒しの手

人間は心を守るために、本当に苦しかった出来事の記憶を敢えて留めないといわれています。私は下記の一節に、苦しみの中にも感覚が記憶として残ることを知りました。

ロバート・ジェイムズ・ウォーレスは今でもそのときの看護婦のことを「人のかたちをした奇跡」として思い出すという。「彼女の柔らかな、石けんのついた手が、私の足をやさしく洗ってくれたあのときのことは、私の心に刻みこまれており、私が天に召されるときには、そのことを天国でしっかりと記録することが私の務めです」—「第二波 第三波」本

書・p167より一

「スパニッシュ・インフルエンザ」は兵士を運ぶ洋上で蔓延し、あっという間に死体が船底に設けられた安置場を埋め尽くしました。生死をさまよう中で兵士が足浴を介して感じた看護者の手のやさしさ、温かさが伝わる描写に心を打たれます。これは私の推測ですが、安置場に運び込まれるおびただしい死体を見つめながら、多くの看護者が絶望に苛まれていたことでしょう。足を洗うという行為は、兵士を癒すと同時に生命の兆候という感覚で看護者を癒していたにちがいません。「人を癒し癒されること」これは普遍的な看護の本質であると考えます。

3. 学生の皆さんへ伝えたいこと

私は本書で看護の偉業や本質に触れながら、25年前に新人看護師として働きはじめた頃のことを思い出しました。

新人の半年間は何をしてもうまくいかず、緊張に満ち満ちた日々を過ごしました。憧れの白衣を身にまとったものの、自分の無力さに押しつぶされそうになり、病棟の片隅で泣いたことも数知れません。そのようなとき、患者さんの体を拭きながら手に伝わる体温に癒され、心の緊張や体の疲れが解きほぐされたことを鮮明に覚えています。

学生の皆さんが活躍されるこれからの医療は、厳しさも社会的要請も高まっていくと思われまます。そのような中でちょっぴり疲れを感じたら、おまじないのように「看護は人を癒し癒される仕事である」と呟いてみてください。日常的な仕事から思いがけない力を得られ、心身共に充足する経験をされると思います。そんな私は赤く腫れた目で働いていた自分を思い出しながら、実習記録への赤字コメントを控えようと思っています。

【ご紹介の本】

アルフレッド・W・クロスビー 西村秀一訳：史上最悪のインフルエンザ 忘れられたパンデミック、みすず書房、2004年

*当館でも所蔵しております。

請求記号 493.87 : C93

